# 岩手医科大学歯学会第7回例会抄録

日時：昭和54年2月24日（土）午後2時
会場：岩手医科大学歯学部講堂

座長　甘利　英一

## 演題1　各種歯垢染め出し剤の特性について

○橋浦礼二郎，田沢　光正，宮沢　正人
高江洲義矩

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座

歯垢染め出し剤は臨床的並びに公衆衛生の場で広く用いられていますが，各種の染め出し剤の特性についてと，歯垢の染色性およびその用途などについての比較検討が充分になされていない。演者らは，各種の染め出し剤のうち，今回，(1)0.2%中性紅溶液，(2)Erythrosin（2%F.D.C.Red#3，商品名 Red-cote）(3)0.1%ゲンチアナ紫溶液，二色性染め出し剤として，(4)dic-plapue（Frythrosin+Fastgreen，市販品），(5)MT-750（Methylene blue+2，3，5-Triphenyltetrazolium chloride．片山の処方）の5種について，同一被験者の口腔内で実験的観察を行った。被験者は7歳と12歳及び25歳と28歳の男子4名で，24時間あるいは3～4日間の歯みがき禁止による歯垢についての染色性を口腔内カラー写真撮影によって判定した。

歯垢染め出し剤の特性として，大きく分けて，(1)染色性（識別性，濃淡，範囲など），(2)毒性（低毒性さらに非不快性，使用頻度による），(3)脱色性（口腔内，皮膚，衣服），(4)反応性（口腔内 Microflora：immatured and matured plaque，酸化還元電位による変化）の四つの性状があげられ，前記の5種の染め出し剤についてのこれらの特性の比較では，中性紅とゲンチアナ紫とMT-750が良好であった。ただし，中性紅は味の不快，ゲンチアナ紫は脱色性，MT-750は反応時間が長いというそれぞれの欠点を有している。

従来，歯垢染め出し剤は口腔刷掃指導において動機づけとして用いられているが，二色性の染め出し剤の導入は，単に動機づけにとどまらず，歯周疾患への予防のための認識を向上させる点で，今後，一層有効な染め出し剤として開発させる必要があると考える。

## 演題2　本学小児歯科における初診患者の実態調査

○佐々木勝忠，甘利　英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

昭和53年11月より1年間に本学小児歯科を訪れた初診患児は907名で，そのうち記載もれのない819名（男児418名，女児401名）の初診録から，患児の地域分布，年齢分布，主訴，各乳歯のう蝕罹患状態，う蝕型，母親教室への出席率について調査し，また昭和40年11月より半年間の初診患児と比較検討した。

地域分布では，居住が盛岡保健所管内であるもの559名と68.3%を占める。盛岡を境として岩手県を南北に分けた場合，県北から，しかも交通の便のいい東北本線沿いからの初診患児が多い。月別初診患児数は月平均76名であるが，1月，3月，6月，8月がとくに多い。

主訴についてはう蝕治療60.4%，その他25.2%，歯並び10.4%，う蝕予防4.0%の順であり，う蝕予防を希望するものが著しく低い。またう蝕治療の希望のうち痛くない32.5%，痛い21.5%，はれた6.5%で，他大学と比較して症状が出現してから来院する患児が多い。

各歯種別う蝕罹患状態は，昭和52年のものと昭和40年のものとではさほど差がないが，前者では後者に比較して1，2歳児の割合が高くなり来院患児の低年化を認める。

う蝕の広がりでは昭和52年のものO型11.8%，Ⅰ型10.3%，Ⅱ型8.9%，Ⅲ型34.7%，Ⅳ型34.3%であり，昭和40年のものO型2.7%，Ⅰ型3.0%，Ⅱ型11.5%，Ⅲ型42.4%，Ⅳ型40.5%であり，前者の方がⅢ，Ⅳ型の広範囲性う蝕の割合が少ない。しかしながら各型の年齢別観察ではⅢ，Ⅳ型において，昭和52年が1，2歳に高率を示す。

母親教室への出席率は2，5歳児の父兄が良好（60